

# 白雲片片

## 第二十九回 「運水及び搬柴」 最終回

十四年にわたりこの紙面を担当させて頂いておりましたが、この春に卒会いたしますので今回で最後となります。分不相応ながら長い間続けさせて頂きまして、ありがとうございました。

第一回から二十回ほど真字正法眼蔵の古則を紹介した後は、その時々に関心を持ったことを紙面に活用させて頂きました。ほとんどが過去の祖師方の行蹟に関するものでしたが、今回で最後ですので少し方向性を変えて、私の故郷や現在の状況などを主題にしてみたいと思います。

私は十三教区の観音寺（周南市／須金）で育ちました。故郷の須金は徳山の市街地から30 kmほど山の中に入った周南市の最北端にあり、周囲を全て山に囲まれた自然豊かな集落です。その昔、源氏との戦に敗れた平氏の家臣たちが追手から逃れて隠れ住んだと伝わっており、その言い

伝えも頷けるような交通の不便な所です。私は地元の小中学校を卒業した後、徳山の市街地にある高校へ通いましたが、徒歩とバスでの通学に往復三時間近くかかっていました。

師寮寺の観音寺がある場所は須金の須万という地区の山の中で、すぐ近くには浄土真宗と浄土宗の寺院、そして八幡宮があります。鬱蒼とした森の中に三ヶ寺と一社が混在しており、山全体に宗教的な雰囲気があります。あちこちに古い地藏菩薩や観世音菩薩の石像が安置されており、神様が祀つてある祠や墓地も点在しています。すでに切り倒されたものもありますが、私が子供の頃には相当な樹齢であったであろう巨木がいくつも立ち並び、さながらとなりのトトロに出てくるような環境の中で育ちました。今でも樹木が生い茂る苔むした静かな場所が好きなのですが、それは育つたこの環境が影響していると思います。

観音寺と隣接している八幡宮には、大昔に落雷で枯れた大木が御神木として祀られています。古く大きな鳥居や狛犬、寄進された武将の古い絵画などがあり、子供の頃はこれらを見るのが好きでよく行ってました。私は神道については無知ですが、子供の頃に遊んだ記憶が強く残っているためか仏教や寺院だけではなく、日本古来の神道や神社も大切に

したい思いがあります。

観音寺の伽藍は江戸時代中期の建物ですが、森に囲まれているので昼間でも照明をつけないと暗い部屋が多いです。夏場はいろんな昆虫が数多く中へ入って来ていました。最近は減りましたが、冬が近づくと今では信じられないほど大量のホウムシ（茶色いカメムシ）が越冬のために侵入してきて足の踏み場に困るほどでした。よくこの虫がどのぐらい中に入ってくるかによって冬の寒さが予測できると言われていますが、毎年多いのでよく分かりませんでした。匂いは頭痛がするほど強烈ですが、ストーブの前で暖を取る姿はなかなか可愛いです。この虫の独特な匂いは水で洗ってもあまり落ちませんが、油で擦ると取れやすくなります。

故郷にはツキノワグマを頂点とした色々な生物が中にも外にもたくさんいましたので、危険でなければ手で捕まえらるようになります。皆さんが嫌がるゴキブリでも大丈夫です。さすがにネズミやコウモリは咬かまれると病気になるかもしれないので素手では捕まえずに虫取り網で捕まえていました。梅雨時から注意しないといけないのがトビズムカデ（大ムカデ）です。このムカデは国内最大種で、畳の上を歩く時に引っこ掻くような音を立てます。大きい割に身軽なので、見つけたら一刻も早

く火バサミで捕まえておかないといけません。寝室で行方を見失ったら家族全員が気になって眠れなくなります。ちなみに、ムカデに咬まれて痛がっている方に時々出会いますが、ムカデの毒はタンパク質でできているので熱を加えると分解されますから、咬まれたらできるだけ早く43℃以上の、火傷やけどをしない程度のお湯で患部を20分ほど流し、ステロイド系の軟膏なんこうを塗ると治りが早いです。冷水や、ぬるいお湯で流すと悪化する可能性があります。私は一昨年、初めて咬まれて経験したことがない痛みに驚きましたが、右に紹介した応急処置をしたらその日に治りましたので方が一の時は試してみてください。

話が逸れましたが、私は現在、本務地（龍豊寺／周南・旧徳山市）と兼務地（貞昌寺／周南・旧熊毛町）の二ヶ寺を務めており、どちらも過疎高齢化の地域にあります。二ヶ寺ともに檀信徒の戸数は百戸以下で、半数以上の方がお寺のある地域からは転出されております。二〇一五年に宗務庁から発行された『曹洞宗宗勢総合調査報告書』を見ますと、一ヶ寺あたりの檀信徒戸数は全国平均が一四七・二戸となっておりますので、私のお寺はどちらも平均より少ないようです。

龍豊寺は八町（およそ八ヘクタール）、貞昌寺は十三町（およそ十三ヘクタール）ほどの土地を所有しており、どちらも時の領主から安堵あんどされた寺領の名残なごりです。

龍豊寺がある地域は標高が高く、猛暑日が多い近年の夏季では涼しいほうだと思いますが、冬場は積雪量が多いので車は四輪駆動式で冬タイヤが必須です。周辺のほとんどが山林と田畑のりめんで法面のりめんが多く、草を枯らすと崩れるので除草剤を使用できる箇所が限られています。伽藍の周辺には個人的に所有している田畑が七反たんあるのですが、専ら草刈りをして保全管理をしています。また、樹木が多いのでノコギリやチェーンソーで枝打ちと伐採を頻繁にする必要があります。

屋外作業で一番肉体的に堪えるのは真夏の作業で出た大量の枯れ草や樹木を集めて燃やす時です。樹木は立っている時はそう感じませんが、倒すと非常に大きく感じますし何より重たいです。本来、多くの樹木の伐採作業は木々が眠りにつく冬季にやるべきなのですが、冬は積雪が多く作業があまり進みませんので、一年の中でまとまった時間が取れる時にやっています。

貞昌寺は山間部とは言ってもそれほど標高がないので積雪はほとんど

ありません。伽藍の裏にそびえる城山じょうやまという山の頂上に三丘ヶ嶽城みつおがたけじょうと呼ばれていた山城があつたそうで、伽藍がある場所は城主が平時に居住していた屋敷跡です。そのためか平坦な広い土地にありますので、ある程度は除草剤を使用することができます。しかしその平地以外はほぼ山で鬱蒼としており、倒木などで人に迷惑をかけそうな箇所が多く、檀信徒の方に協力をお願いして毎年伐採をしているのですが、広範囲ですのになかなか手が行き届いていないのが現状です。

このように私の生活は住職・屋外作業員・家族の世話係を三分の一ずつやる毎日なのですが、ここで正法眼蔵「神通」巻にある一文を紹介致します。

（前略）龐居士ほうこじ蘊公は祖席の偉人なり。江西・石頭こくせいの両席せきどうに参学せるのみにあらず、有道うどうの宗師そうしにおほく相見しょうけんし相逢そうぼうきたる。あるときいはく、神通じんずう並びに妙用みょうゆうとは、運水うんすい及び搬柴はんさいと。（後略）

龐居士ほうこじ蘊公うんこうは龐蘊居士ほううんこじとも呼ばれている方です。諱いみなが蘊おんで字あざなは道玄どうげん、在家のままでも多くの高僧に参禅した人物として知られています。积尊じくそんの在俗の弟子とされる維摩居士ゆいまこじのように出家者との問答を多く行ったこと

から「震旦しんたんの維摩居士ゆいまこじ」と呼ばれて語録も伝わります。右に挙げた文の

最後の行は龐居士の言葉と伝わっていますが、意味は大体次の通りです。

神通・・・不可思議で神秘的な働き

妙用・・・表現できないほど優れた機能

これらは水を運ぶことや柴を運ぶことである。

随分前ですが、初めてこの言葉を目にした時は非常に感激しました。

「水を運ぶ」・「柴を持ち運ぶ」というのは、誰もが日常の中で行う、平凡な行為の一例を挙げられたのだと思います。この龐居士の言葉以外にも「喫茶喫飯」や「行住坐臥」など、仏道を日常の行為で表すものはいくさんあると思いますが、私はどうしてもこの「神通並妙用 運水及搬柴」という言葉が感覚的にしっくりきます。恐らく自分の日常に近い印象を受けるからではないかと思っています。

子供の頃、本師が外作業をしている姿を頻繁に目にしていました。もちろん威儀を具している姿も目にはしていましたが、どちらかというと作業着姿の記憶のほうが大きいです。本師は住職をしながら鉄鋼会社の三交代勤務にも出ていましたので、勤務以外の空いた時間に檀務や作務

をこなしていたのですが、日が落ちて暗い中、ヘッドライトを点けて草刈りをしていることがよくありました。普通は田舎の人でもそんなことはしません。多分、そうしないと終わらなかつたのだと思います。今思えばあの姿から、知らず知らずのうちに何かしらの示唆を与えられていたような気がします。本師は今年で七十六歳になりますが、若い頃から睡眠時間もまともにとれないまま働き詰めでした。そろそろ膝や腰が痛んだり何かの病気をしても不思議ではないのですが、生まれつき丈夫なのか、本当は痛いけど言わないだけなのか分かりませんが、後期高齢者とは思えないほど活力があることは確かです。

私がまだ十代の頃に本師からこう言われたことがあります。

「若い時は自分から進んで苦労しちよけよ。理屈ばかり言うてもつまらん。言うだけなら簡単じゃけえの。実際にやるんが難しいんぞ。」

これはもう本当にごもつともな話で、色々なことを経験すればするほどその通りだと思わざるを得ません。高齢化社会の中で初老過ぎが若いうちに入るのかどうか分かりませんが、私は体が動くうちは動き続けるつもりです。最後に、ここまでお目通し下さいました皆様の今後の御隆盛と御健康を祈念して結びと致します。ありがとうございました。